住居の理想形に関する考察

江 山 正 美

Dissertation on the ideal form of habitation

By Masami EYAMA

1 序章

造園が人間を中心とした広義の環境計画である限り、造園の基本問題のひとつに、居住形態があると言えよう。ここで居住形態と言うのは、睡眠を中心とした人間の生活形を指すのである。言うまでもなくこの生活形は、観光地その他におけるレクリエーションのほかビジネスその他の中にも介在するが、ここではこの生活形の支配力が最も強い日常生活の分野を基調に考察する。居住形態の基調を以上のように規定すると、人間の住居の形態が、造園の基本問題として考えられる。しかしながら造園学はこれまでこの問題にはほとんど無関心であり、その理想形についても、真剣な追求を怠った嫌がある。

周知のように造園は、人間の日常生活の拠点である居住環境の計画からはじまった。人間の生活圏が文化の進展と共に拡大するに伴って、造園は単なる居住環境の計画だけでなく、広汎に亘る複雑多岐な人間の生活環境を対象にしたが、しかし基本的な人間の居住形態については、深い追求を怠って来た。「特殊な蘭や金魚などについては、理想の環境に関する研究が沢山あるのに、人間に対する研究は皆無である。造園学が挑戦しなければならない新しい研究の分野がこの点だ。」と主張するJ. O. Simonds(1)の主張を拡大するなら、人間の理想的な居住形態が何であるかは、造園学の基本命題のひとつと言ってよい。

2 既往の研究に対する考察

周知のように現代の居住形態は、二つの類型で考えることが出来る。そのひとつは高層が低層かであり、他のひとつは独立か集合かである。この二つの類型が組合されて特定の形を生むことになる。いくつかの居住形態に関して、理想形態が何であるかの追求は、建築、都市計画の分野においては直接、間接に試みられているが、徹底的な追求とは言えないようである。

住宅形式に関し、小住宅か低層が高層かの問題を追求した代表的なものは、W. Gropius(2)であろう。彼の主張は中途半端な低層アパートメントをまず否定し、高層

アパートメントは決して必要悪ではないと強調し、これこそ生物学的に自然発生した住居の形態であり、当然の所産であると主張する。彼によれば、人間が生れながらに土に親しむと言う主張には、科学的証明が欠けるとし、この主張を根拠に大家族住居を一方向的に擁護する人々も、高い所に住めば住むほど騒音の被害が少なく、平静な生活が得られ、眺望も自由であり、高層アパートメントにこそアットホームの感を抱くであろうと強調する。居住形態に関する彼の主張は、高層アパートメントを一義的に肯定するのである。言うまでもなくこの結論は、特定地域内に一定数の家族を設定しての立論である。当然の結果として、高層アパートの場合には最も効果的な広い緑地が得られるという主張を伴っている。このような立場からの比較論は、Le Corbusier(3)の場合も同様である。周知のように彼も亦高層形態を強調しているが、その有力な論拠は、特定地域に対して単独住居の場合よりはるかにまとまった大きな空地が得られる点を挙げている。彼によれば特定戸数に対して単一の高層アパートメント形態にすれば、単独住居形態の場合に比較して、効果的な空地が得られる上に、所要面積が少なくすむ点を強調している。この主張は彼の所論 Vertical garden city に通ずるのである。W. Gropius と言い、Le Corbusier と言い、居住形態に関してはいずれも高層アパートメントの形態を一義的に主張しているがしかし他面単独住居形態も肯定している。W. Gropius(2)は前述した所論の結論において、個人住宅と高層アパートメントブロックは実際の要求に応じて同時に展開発展させなければならないとし、人口密度の低い郊外では1~2階建の住居を主張し、人口密度の高い都市では、経済効果を伴うならば10~12階の高層アパートメントブロックを主張するのである。彼によれば、単独住居形態が高層アパートメント形態かを決定するのは、社会的経済的因子であるとされている。つまり彼においては、社会的経済的因子を離れて、純粹に人間の理想的な居住形態が低層か高層かの問題は追求されていないのである。Le Corbusier の場合も同様である。彼も亦その主張する理想都市において、高層アパートメント形態を支持するがしかし、一方では小都市 Stamboul にみられる低層形態を否定しないのである。両者の思想に共通して言えるこ

とは、環境をとりまく豊富な緑の必要であり、居住形態については、単独住居形態と高層アパートメント形態とを共に肯定するのである。両者のいずれが人間の居住形態として理想であるかについては追求を回避している。

人間の居住形態に関する低層、高層の問題又は独立、集合の問題に関する基本的な研究は、厳密に言うところまで試みられていないといってよい。過去のすべての研究は、居住形態に関しては、すべての形態を夫々肯定しているからである。例えば L. D. Gottlieb(4)は、居住形態として独立住宅と集合アパートメントの二つの形態を共に肯定し、それに加えて第三の居住形態として、トレーラー又は移動住宅を考えているにすぎない。更に又人間の理想都市に関する研究は E. Howard(5) に先立って、T. Fritsch(6)が最初と考えられるが、以来多くの研究が重ねられたのは周知の通りである。人間生活を基調とする理想都市に関する多数の研究がある限り、居住形態に関する理想形の追求があって当然と考えられるのに、居住形態に関しては、すべての形態をそのまま肯定する見解がとられて来たのである。理想都市に関する総合研究のひとつである T. A. Reiner(7)の研究によれば、既往の理想都市研究においては、人間の理想的な住居密度が未解決である。Reinerの研究によれば、理想都市における住居地域の Gross density は、1 エーカーに対して最高 100 戸、最低 1/4 戸又は 1 戸と言う広い巾をもっている。最高 100 戸は、P. Goodman(8)の理想都市であり、最低 1/4 戸又は 1 戸は F. L. Wright(9)の理想都市 Broadacre City の場合である。P. Goodman の理想都市の場合 郊外の一部に 1 エーカー当り 1/4 戸の部分があるが、全体的にみると F. L. Wright の理想都市が 最低値を示すと考えてよい。その他の理想都市研究における居住密度は、すべて両者の中間に介在している。このことはとりもなおさず独立住居から高層アパートメントまで、すべての居住形態を肯定していることに他ならない。ここでも亦人間の居住形態の理想形が低層か高層かの問題は未踏の分野であると言ってよい。

3 理想の居住形態

低層か高層か、独立か集合かの点で、理想の居住形態が存在するか否かの追求は、結局人間自体の追求に帰着する。この課題は造園や都市計画だけの問題でなく、人間を追求する広汎な学問の分野に広がる。それは極めて困難な課題と言えるが、ここで若干の追求を試みよう。

前述した W. Gropius や Le Corbusier の他多くの理想都市形態に関する研究で、共通して言えることは、豊かな緑が居住環境に肯定されている点である。特に Le Corbusier の一連の研究を貫く根本思想は、自然と人間の共存であり、両者の平衡である。W. Gropius も亦自然

は人間の日常生活の体験でなければならないと言う根本思想に立脚している。したがっていずれの居住形態においても、豊かな自然、豊富な緑が肯定される環境を理想とするのである。この場合残されている問題は、どの居住形態が自然との結合が最も容易であるかの問題にすぎないことになる。結論を言うと、高層アパートメントより独立住居の方が自然と人間の結合には適切である。したがって人間の居住形態の理想形は、独立住居と言うことが出来ると考える。にもかかわらず既往の多くの研究が独立住居と対照的な高層アパートメント形態を強調し支持したのは何に起因するのであろうか。

人類の文化史の中で、最も顕著な形は、都市の発達である。都市とは特定の地域に多数の人間が集合した形態である。特定地域に多数の人間が集合し、しかもその地域に豊かな緑を共存させようとすると、その解決は高層建築以外に途がない。しかも大都市に発達し、更に巨帯都市 (megapolis) 化する傾向は否定出来ない文化史の宿命である。ソ連でさえモスクワの人口制限に失敗する程、近代都市のもつ人間吸引力は強大で魅力的である。この流れの中に生きる人間の弱さが、高層アパートメント形態を優先的に肯定したと言ってよい。前述した通り W. Gropius は高層アパートメント形態の長所を強調したが、しかし私には彼の思想の中に理想の居住形態として独立住居が潜在しつづけていたと考える。高層アパートメント形態をあれだけ強調しながら他方独立住居を同時に肯定した彼の結論がその点を明示しているように考える。Michel Ragon(10) は名著われわれは明日どこに住むかの中で、「小さな庭に囲まれた郊外の小さな家」の考え方をもちつづけると、未来の人間の集団住居に適応することは至難であるとして、独立住居を一応否定している。がしかし彼の思想の中にも亦独立住居を肯定する思想が内在しているのである。一人の人間の思想の中に二つの相反した居住形態が同時に肯定されていると言うことは、理想都市に関するほとんどの研究に共通して言える特性と言ってよい。

人間自体も又人間のつくる文化も極めて複雑多岐で、単純な割りきり方は不可能であるが、私は極めて単純に人間も文化も史的に見ると、biological から mechanical への発展展開の型として把握する。本来 biological な人間に漸次 mechanical なものが加わって来たのが文化史の主流であったと考える。そして近代は mechanical な一面が強調されていると考える。だがしかし biological な人間性は近代人の中にも常に生きつづけている。近代人ないし近代文化をとらえるには、この相反する二面即ち biological と mechanical の二面においてとらえることが肝要である。しかも人間とその文化は、mechanical な面では進展をつづけて来たが、他方 biological な面では

ほとんど進展がないと言ってよい。人間の中に秘められた biological な野性、基本的欲求は少しも変化しないとするのが妥当である。勿論人間の行動形態更にその背後にある人間心理は変化をつづけた。更にその変化は居住形態ないし都市環境と人間とが相互に影響し合ってきたのは事実である。人間が都市を造る、都市が人間を造るとよく言われるのは、この点を指すのであるが、しかしそれよりもう一步深いところの人間の biological な基本的な存在は少しも変わっていないと言うことが出来る。端的に指摘されることは、もともと biological な人間に mechanical なものが次々に加わった点である。しかも近代人のもつこの二面性は個人の中に共存するのである。個人の中に共存する二つの要素の割合は、個人によって異なる。同じ個人でも年令ないし時間的に変化する。更に重要なことは個人の中に共存する二つの要素は相反する性格をもつのである。人間がひとつの主張をするときにも、この相反する二面は常に内部で抗争する。だからこそ W. Gropius の場合も 高層アパートメント形態を主張しながらも結論においては独立住居を共に認めることになるのである。Le Corbusier も亦同様である。彼等や多くの理想都市研究が強調した居住環境の豊富な自然と言う主張は、人間の biological な一面に基調を置くのである。独立住居の肯定も亦同様である。高層アパートメント形態を主張するのは、人間の mechanical な一面に起因するのである。

理想の居住形態に関する問題は、最初に指摘した通り人間自体に関する問題である。この場合理想と言うのは「かくあるべきだ」と言う主張のことである。文化の推移をそのまま追跡して、「かくなるだろう」と言うことではない。しかしながら近代人ないし近代文化から mechanical な特性を否定することは出来ない。さりとて人間のもつ biological な特性を無視することも出来ないのである。理想の発見は両者の調和の発見に他ならぬ。この理論を居住形態について展開すると、人間の居住形態は理想的には二つの住居が必要になる。そのひとつは自然と密着する独立住居であり、他のひとつは都心に設けられるビジネスの為の住居である。後者の場合は mechanical な特性を基調とするので 高層アパートメント形態が望ましく、極論すると環境の自然は二義的であってよい。このように二つの住居を肯定する主張は、既往の研究における第二の住居の主張の展開である。ここで再び M. Ragon の主張を取りあげよう。彼は人間の居住形態の未来像として、第二の住居が生活の中心となり都心の第一の住居は仮りの住居になるであろうと主張している。更にまた M. Ragon は都市と農村の重合を主張し、都市の分散を主張している。庭に囲まれた小さな家と言う主張を軽視する M. Ragon は他面において郊外の

第二住居を強調するのである。彼の場合も亦彼自身の中にある biological と mechanical の二面を自から肯定しているのである。

ここで再び問題設定の最初の段階に帰ってみる。設定した問題は W. Gropius に従って、独立住居か低層アパートメントか高層アパートメントがであった。しかしながら biological と mechanical な相反する二面を共有する人間に対して、特定の居住形態のいずれが適当であるかと言う問題の設定自体に問題があるのである。独立住居は biological な人間性に対して理想の居住形態であり、高層アパートメントは mechanical な人間性に適する理想形態であるからである。したがって特定の人間の理想の居住形態は、この二つの居住形態を同時にもつことだと言うことになる。だがしかし更に理想を追求するなら、人間の居住形態の理想形は緑豊かな独立住居が基調であり、高層アパートメント形態は、ビジネスのための仮住居であることが最も望ましいと言えるよう。

4 終章

人間の理想的な居住形態は、人間のもつ biological な特性に基礎を置くと、独立住居の形態になる。mechanical な人間性を基調にすると高層アパートメント形態になる。しかしながら J. O. Simonds⁽¹⁾ の造園学に追従して近代造園学が人間を動物と考える立脚点から出発するとすると、biological な人間性を尊重することになり、理想の居住形態は独立住居が一義的に考えられねばならぬ。mechanical な人間の居住形態としての高層アパートメント形態は二義的に考えることが妥当と言ってよい。

理想都市に関する既往の数多くの研究は、居住形態の如何を問わず環境に豊富な自然を強調した。このことは biological な人間性の主張であり、肯定であるが、しかし mechanical な人間性を基調としたときには、環境の自然の価値は低下する。本論で私は具体的な数値ないしスケールを明示出来ないが、自然要素を排除した相当大きな mechanical な単純空間が、ビジネス地域では肯定されると考える。居住形態の如何を問わず、過去の造園学ないし理想都市計画は、生活空間の中に常に natural な要素と artificial な要素の平面時な同時共存理論が基調であった。二つの要素は都心と言わず郊外と言わず、商業地域と言わず、住居地域と言わず常に同時共存の形態を基調として来た。この基調は artificial な要素のスケールが左程大きくないある一定の限界までは成立するが、近代都市のように artificial な要素のスケールが著しく拡大すると成立しなくなる。natural な要素との平面共存が否定されて来るからである。Le Corbusier に端を発すると考えられる両要素の立体共存が多くの計画で追求されて来たのはそのためである。造園家の中では G. A. Jellicoe

oe(11)の motopia がその代表である。natural な要素を地上に確保し居住空間や道路を上空に重合させようとする理論である。しかしながら二要素の上下重合理論と言っても平面図的には矢張り同時共存理論にすぎないのである。とは言えこの場合二要素の共存ではあるが、夫々のスケールが互に大きくなるのである。小さくみると両要素は別個独立の形をとるが、大きくみると両要素が同時共存の形をとることに他ならない。つまり局部的には natural な空間 又は artificial な空間だけと言うことである。この分離論は 前述した住居の分離論に通ずるのである。人間の生活を二つに分離するときには、natural ないし biological なものと artificial ないし mechanical なものと二つに分離するのが最も妥当である。この考え方が理想の居住形態を二つの型に導いたのである。

以上の結論の前提には極めて重要な二つの基本問題が設定されている。そのひとつは理想の居住形態を考える場合、考え方の基本になる人間像は職場即ち仕事をもつ人間であり、そのふたつは職場と住居とが分離している、と言う設定である。第一の基本問題は特定の人間像が基調であって、特定の人間像つまり特定の生活形をもつ一人の人間が基調である。言いかえると特定の家族を基調としたものでない点である。家族は個人個人生活形を異にするので、その複合生活形を基調とすると、理想の居住形態の追求自体が不能に近い課題となる。したがって本論では職場をもつ人間を中心として理想の居住形態を追求したのである。第二に職場と住居の分離論に立脚したのは、この方向が近代都市の方向でありそれは同時に近代人に必要な biological な人間性の回復が可能な途と考えたからである。既往の理想都市研究の多くは、都市人口規模が比較的すくないものが多い。その基調には職場と住居の近接が考えられたからである。周知のように M. Wagner⁽¹²⁾ による都市公共緑地に関する研究は、Berlin に対して5階建を標準にしたのであった。この場合 W. Gropius や Le Corbusier が否定した低層アパートメント形態を肯定したのである。このことは職場と住居の近接一体化が考え方の基調であったからに他ならない。しかしながら近代都市における mechanical な空間は、その規模を拡大して来た。そこは biological な空間の共存をむしろ否定する空間と言ってよい。人間にとって最も必要な biological な空間を回復するためには、職場と住居は分離することが必要になる。そして職場にはビジネスのための仮住居が肯定されるのが妥当である。biological な単独住居は職場をもつ人間にとってもその家族にとっても同様に理想の居住形態と言うことが出来る。

以上のような結論は、具体的ないくつかの問題につな

がって来る。都市における mechanical な居住形態は比較的大きなスケールの高層集合住宅形態をとり、職場も亦同様な規模となり、この大きな mechanical な空間と平衡する巨大な緑地が共存する形が理想形となる。この場合の住居は前述した通りビジネスのための仮住居になることが理想である。他方 biological な人間の理想の住居として、自然と直接結合する独立住居が考えられる。この場合は当然低層形態になる。ニュータウンとして著名なストックホルムの Vällingby は、低層住宅と高層住宅の組合せであるが、ここでは人間の biological な特性と mechanical な特性を共に肯定していると言える。ロンドン郊外の ニュータウン Basildon は、低層住宅が支配的であり、高層アパートメントは独身者用として僅か肯定されているにすぎない。この場合は biological な人間性がより尊重されていると見てよからう。自然公園は言うまでもなく biological な人間性の回復が目標である。したがって自然公園における宿泊施設は、低層分離の形態が理想形でなければならない。この意味からバンフ国立公園の Hot Spring Hotel などは否定されなければならないことになる。

引用文献

- (1) Simonds, Ormsbee Jhon; Landscape Architecture—The shaping of man's natural environment, New York, 1961
- (2) Groipus, Walter; (A) Flach-Mittel-order Hochbau?, CIAM, Rationelle Bebauungs weisen, ss. 26-47, Verlag Englert & Schlosser, 1931 (B) Scope of Total Architecture, Harper & Brothers, 1943 (蔵田周志、戸川敬一共訳; 生活空間の創造、彰国社、1958)
- (3) Le Corbusier; The Home of Man (from the French La Maison des Homes), London, Architectural Press, 1948
- (4) Gottlieb, L. D.; Environment and Design in Housing, New York, The Macmillann Co., 1965
- (5) Howard, Ebenezer; Tomorrow, A Peaceful Path to Reform, London, S. Sonnenschein, 1898 (Garden Cities of Tomorrow, New Edition, ed. by F. J. Osborn, London, Faber & Faber, 1946)
- (6) Fritsch, Theodor; Die Stadt der Zukunft, Leipzig, Hammer, 1896
- (7) Reiner, Thomas A.; The Place of the Ideal Community in Urban Planning, Philadelphia, Univ. of Penn. Press, 1963
- (8) Goodman, Paul and Goodman, Percival; Communities, Chicago, Univ. of Chicago, 1947

- (9) Wright, Frank Lloyd; (A) The Disappearing City, New York, Payson, 1932 (B) Broadacre City, a New Community Plan, Architectural Record, LXXVII, April, 1935, pp. 243-254
- (10) Ragon, Michel; Oú vivrons-nous demain?, Robert Laffont, 1963, (宮川淳訳: われわれは明日どこに住むか、美術出版社、1965)
- (11) Jellicoe, G. A.; Motopia, a study in the evolution of urban Landscape, London, Longacre Press Ltd., 1961
- (12) Wagner, Martin; Städtische Freiflächenpolitik, Berlin, 1915 (43.1.10受付)

Résumé

Landscape Architecture may be realized as the shaping of ideal environment about human life. So the problem of ideal habitation is the fundamental one of Landscape Architecture not only in Architecture alone. Walter Gropius(2), as is generally known, has devoted deep study to dive into the ideal form of human habitation. In conclusion, he affirm two types of habitation, namely single family house and garden apartment of 10-12 stories. But his conclusion was reduced from the standpoint of social and economical elements, not from the intrinsic nature of man.

We have, as also generally known, many studies about the ideal city since Theodor Fritsch of 1896. The standards of population density in these many studies have vary wide range between 100 dwelling units to 1/2 dwelling unit per gross residential acre.

This means that there are many types of ideal habitation. It may be said that we have no conclusion about the form of ideal habitation.

We, human, have many complicated characters, but the best way for the solution of this problem is to realize human characters as the two contrast characters namely biological and mechanical. The ideal habitation for biological man may be assumed as the single family house closely connected with nature and the ideal one for mechanical man may be reduced to the garden apartment containing multiple families. It is very important that these two characters which are contrast each other exist together within each person. The ideal habitations may be considered generally as the above two types at the same time. But I lay stress on our biological character. It is because that we are a part of nature still and we cannot escape the uncomfortable question of how much of nature we can destroy without destroying ourselves. We must discover some wise principle of co-existence between man and nature. But finally, the ground in its various symbolic aspect may be considered as "mother earth", or as "the last resting place". I assume that the ideal habitation is the single family house co-existing with nature. The habitation type of high apartment may be considered as the temporary habitation just as high hotel or business residence in the city center. Though there are some gap between the ideal and the actual, this is my conclusion about the ideal habitation.

造園雑誌バックナンバー在庫調べ

Vol. 25 No. 1 (昭37)

- 芝、地被に関するシンポジウム
—現状と今後の課題—
- 造園環境論序説 新田 伸三
- 造園計画に関する基礎的研究 (2) 久保 貞
- 京都御苑の利用実態について 近藤 公夫
- 西洋芝の生育に及ぼす肥料3要素の効果
—西洋芝の基礎的研究(4)— 北村文雄・小沢知雄

Vol. 25 No. 2

- 西芳寺洪隠山石庭の主題と形成の時期 堤 久雄
- 中ノ島公園の歴史的考察 (その1) 高橋理高男
- キャンプ場の気象学的検討 —伊豆達磨山
キャンプ場を対象として— 石井 弘・有光一郎

Vol. 25 No. 3

- 環境造成における造園家の位置 G・A・ジェリコ
- オープンスペースの社会機能
レビュー・マンホード
- 首都圏広域緑地計画におけるレクリエーション
調査の分析
横山光雄・足立弥藤英・福富久夫・竹内侃克
- 荒木田混合度及び張芝法の差異による植付時期
別の日本芝の生育ならびに踏圧による損傷度
に関する研究 本間 啓・小沢知雄・北村文雄
- 春日灯籠および類形的灯籠の形態的特徴につい
て 平山 勝蔵

Vol. 25 No. 4

- ランドスケープ解析の方法とその成果
よき新都市開発のために

(11ページへ)